

---

# 目覚まし時計

ごみ

---

## 注意事項

このPDFファイルは小説サイト「小説家になろう」で掲載中の小説を、「PDF小説ネット」の変換システムが自動的にPDF化したものです。この小説の著作権は作者にあり、作者または「小説家になろう」および「PDF小説ネット」を運営するウメ研究所に無断でこのPDFファイルおよび小説を引用を超える範囲で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止します。小説の紹介や個人用途での印刷および個人用途での保存はご自由にどうぞ。

### 【小説名】

目覚まし時計

### 【Nコード】

N3054D

### 【作者名】

じみ

### 【あらすじ】

遅刻癖の治らない主人公が手に取った一つの目覚まし時計。そこから主人公の生活がみるみるおかしくなり始めます。ミステリーです。ヒッチコック劇場（世にも奇妙な物語のルーツ的テレビ番組）みたいな感じを意識しています。

いつものようにチャーリーが会社に出勤すると、なかばあきらめ顔をした大柄な男は、今日もまた相も変わらず遅刻してきた勇気ある社員をため息混じりに待っていた。一方チャーリーはというと、スーツケースを自分のデスクに置こうともせず、やはりいつものようにウィルズの所へと一直線に進んで行き、弱々しい微笑を浮かべつつ大柄な上司の前に立った。

実際二人とも、もううんざりだった。

嵐の前の静けさ、といった怪しげな静寂がオフィス内に漂い始め、チャーリーは気まずさに身をくねらせ、自分の目の前にふんぞり返っている男が話しかけてくるのを待った。ところがウィルズは何を言う気配もなく、ただ（しかし明らかに敵意を含んだ目で）チャーリーを見ていた。さらに自分が窮屈になったのを感じ、ウィルズから目をそらせようと体を動かしたとき、ふと、まわりが変にピリピリしたおかしな雰囲気になっているのに気づき、彼は思った。

なるほど、これは効果的だ。私を説得するのにはもってこいの雰囲気作りじゃないか。そうとも、ウィルズはいつだって私を説得しようとする。しかし説得なんてのは

「よしわかった」

出し抜けにウィルズはそう言った。チャーリーはびっくりして相手の顔をまじまじと見つめた。一体何がわかったんだ？

「原因があるはずだ、そうだろチャールズ。三十半ばの一人前の男が理由もなしに毎日会社を遅刻してくるわけがない。私を怒らせたためか？それとも他に理由があるのか、どっちなんだ？」

いやみのこもった質問を真剣にとりあおうともせず、チャーリーは言った。

「すみませんチーフ。前々から言ってるように、どうも私は早起きが苦手なたちで…」

彼の曖昧な返事が、一層ウィルズの怒りを駆り立てた。だが今日のウィルズはちよつと違う。彼は普段の展開ではまるで考えられないような、とても穏やかな口調でしゃべり出した。

「しかしねえ、こつ何度も何度も遅刻するというのはえらく非常識なことだとは思わんかね？」

「わかります。ですが」

「いいか、今度遅刻をしてきたら本当にクビだ。君だつてその年で失業したくないだろ。わかつたなチャールズ」

ウィルズはそう言うなり横にあつた書類に目を通し始め、もう話は終わったんだぞという態度をあからさまに示した。チャーリーはもつと言いたいことがあつたのだが、無理にウィルズの癪癢を爆発させることもないだろうと思ひ、静かにその場を離れた。

そう、確かに静かだった。

今朝の二人のやりとりは、いつもに比べてあまりにも静かで平穩すぎた。この異変はチャーリーを動揺させるのに充分な演出だった。奴は本気だ。もしこれから先、ほんの少しでも八時三十分を過ぎて会社に出勤しようものなら、間違いなく会社をやめさせられるだろう。そして私は明日にでもさつそく遅刻をし、クビを宣告されるのだ。

結果は見えている。悲惨な結果が、な。

チャーリーがこうした状況に陥ったのには、ある事件が絡んでいた。彼が結婚していた当時、朝は妻のドリスが起こしてくれていた。ので会社に遅れることはまったくなかった。事の発端は半年前、ドリスがやけにハンサムな若い男と一緒に蒸発したという思いがけない災難からだった。彼女はなんの前ぶれもなく、チャーリーに心の準備を与える間もなくふらりと家を出て行った。二人の間には子供ができなかった。取り残されたかわいそうな男は、四十に手が届こうという年齢で一人きりになってしまった。おまけにドリスはこれで彼女が自分を捨てたことがはっきりしたのだが、老後の資金にと長年かけて貯めてきた貯金を根こそぎ持っていった。十二年間培ってきた信頼を裏切ったその行為は許されざるものであり、自分を侮辱したしうちに腹を立てたチャーリーは彼女を捜そうとしなかった。妻への愛情はまたたく間に憎悪へと変化していった。

チャーリーは仕事をするしか能のない、一人では何もできない男だった。家事全般を自分でしなければならぬというのは彼にとつて非常に苦痛であり、迷惑な労力であった。生活はみるみるうちにずさんになり、健康を害し、この頃から遅刻をするようになり始めた。妻に早々と愛想をつかせたチャーリーはドリスに戻ってきてほしいなどは考えず、これらの問題を自分一人で治していこうと必死にがんばった。二ヶ月ほどたつと一人暮らしにも慣れ、規則正しい生活を送れるようになり完全に立ち直ったかに見えたが、遅刻だけはなぜか治らなかった。ドリスと別れたことによる後遺症として遅刻だけが残ったのだ。月日を重ねるごとに回数は増え続け、会社での信用はガタ落ちし、こうしてウィルズという敵を作るに至った。

そんなおり、ドリスは最近になってもう一度やり直したいといった内容の電話を彼女の実家からかけてくるようになった。チャーリーの思った通り彼女は男にだまされ、かなりの借金を背負って四苦

八苦していた。ドリスが戻ってくれば遅刻の悩みは簡単に解決する。だが彼はこの申し出を屈強に断った。二度といっしょに暮らしたくなかったし、プライドが許さなかった。そもそも、まさか彼自身何をやってしまったか起きられないとは思ってもいなかったのだ。目覚まし時計を買い換えたり、夜の十時には床につき充分な睡眠時間をとったりと数限りない努力を試みた。しかしどうしてもきつちりとした時間に起きることができなかった。起床時間はまちまちで、たいていは午前九時を廻っていた。

結局、彼はどうしようもなかった。

そしてウィルズは彼がどうしようもないことをわかっていなかった。

要するに遅刻に関しての最大の問題はウィルズが何もわかっていないということなのだ。これまで幾度も毎朝の激しい口論と共に説明してきたのに、奴は私にただのだからしない、上司の言うことを聞かない困った社員だと考えている。困っているのはこっちの方なのにそんな悩みには耳を貸そうともせず、それどころか「冗談じゃない 私を説得しようとするのだ。」

「頼むから私の注意を素直に聞いてくれ。遅刻するのはやめてくれ」と。

でもそうじゃない。普通の人間が考えうる、あらゆる方法を試してみても効果がなかったんだ。これ以上どうすりゃいいっていうんだ。

チャーリーは人生を投げたくなっていた。みじめな自分の未来を想像し、運命を呪った。クビという二文字が頭から離れず何も手がつけられない状態になり、その日の仕事ぶりはさんざんだった。

帰宅時間になってもチャリーの気分はいつこうにすぐれなかった。今さらのように彼の悩みが、今朝のウィルズの言葉で心をぐしゃぐしゃにしていた。会社から外に出て駐車場に向かい、やりきれない気持ちで自分の車に乗り込むと、全身の力を抜き取られたようにハンドルにへたれこんだ。冷たい感触が汗ばんだ手のひらに心地良かった。じっとしているとあせりがどこからともなくあふれ出て神経を逆撫でしたが、無気力が感情を押し殺し、まるで死人のごとくしばらくの間目をつぶり固まっていることができた。

チャリーはふと、そのまま眠りたい衝動にかられた。眠り。

その言葉が頭に浮かんだ途端、青ざめ、仰天し、がばつと顔を持ち上げて急いでエンジンをかけた。半分気がふれそうになりながらアクセルをめいっばい踏み込み車を急発進させた。動き出すや否や車は異常を示した。タイヤのこすれる音と共に車体後部は大きく左に触れ、あわててハンドルを強く握り直しゆっくりと車を止めた。タイヤを見ると後輪の片方に小さな金属片がささっており、タイヤの空気はすでに抜けきっていた。どうやら朝走らせていたときすでにパンクしていたらしい。

「ちくしょう！」

チャリーは大声で毒つくつと車を駐車場の真中に置き去りにしたまま足早に通りへと向かい、人ごみにまぎれた。歩いているうちに怒りが沸々とこみ上げ、体中を駆け巡った。

遅刻、ウィルズの悪態、脱力感、パンク、クビ、頭痛。

たくさんの単語が頭の中をぐるぐる渦巻き、それらすべてが怒りへと導いていく。怒りはやがて憂鬱へと変わっていき、元のやりきれない気持ちに執着する…。

無意味に道路標識を見ながらおぼつかない足取りで通りを歩く彼

の姿は、あろうことが睡眠不足で悩んでいるかのようだった。

とにかく明日は絶対に遅刻をしてはならない。彼は気を取り直し、一心不乱に考え始めた。ウィルズに理解を求めるのはもうよそう。何をやっても起きられないなんて誰も信じちゃくれまい。わかってくれと言う方が無理なのだ。それよりも起きる方法を、必ず遅刻しない方法を考えようじゃないか。

目覚まし時計では起きられない。

朝電話をかけてもらってもダメだった。

モーテルに泊まるってのはどうだ？従業員に七時頃モーニングコールをかけさせ、それでも起きなかつたら部屋に入って私を蹴っ飛ばすなりなんなりしてでも起こしてもらおう。チップをはずめばそのくらいはしてくれるだろう。

なるほど、いいアイデアかもしれない。しかし明日はそれで大丈夫だとしても、あさってしあさってはどうする？まさか毎日モーテルに泊まるわけにはいくまい。給料の四分の一が消え去ることになるぞ。

そこまで考えてチャーリーは立ち止まると肩の力をほぐし、一息ついた。そして眉間を指でマッサージしながら再び思考の中に舞い戻った。

遅刻の原因はドリスだ。彼女がいなくなったことは正直いつてつらかった。職場から疲れて帰っても家には誰もいない。食事をしていても酒を飲んでいても常に孤独感がつきまとう。一人でいるとこのまま再婚相手も見つからずさみしい人生を送っていくのだろうかとか、私の老後の世話をしてくれ人間がはたしているのだろうかとかなど悪い方へ悪い方へ考えてしまう。そうした心労が遅刻という形をとって現れているのだ、と思う。私ももう歳だ。精神的にもかなり参っている。医者に診てもらうか？いや、だめだ。休養しろと言われても会社を休むわけにはいかないし、第一ウィルズが休暇を許してくれるはずがない。こっちは遅刻さえできないんだから……。病気だと言えばウィルズは許してくれるだろうか？そしてこれを

きっかけに、私がどうしても起きられないことや遅刻についてちゃんと努力しているんだということを理解してくれるだろうか？

ちがう！そうじゃなくて起きる方法を考えるんじゃないのか！急に悩んでいるのが馬鹿らしくなってきたチャーリーは情けない気持ちから天を仰ぐと上を向いたとき、交差点の向こう側にあるとても大きな時計専門店の看板が目に入った。彼はその看板にすばやく反応し、またもや目覚まし時計を思い浮かべてしまった。もう何度も目覚まし時計は買い換えている。時計を売っている店を見ては性懲りもなく購入し、すべてがむなししい結果に終わっているんだ。いまさら自分を一発で起こしてくれるような代物が見つかるわけないじゃないか。

交差点にたどり着くまで、彼は時計屋を無視して通り過ぎようと思っていた。しかし店の前まで来ると心とは裏腹に足は店の入り口へと吸い寄せられ、いつの間にかその時計屋の重たい扉を開けていた。

店内は薄暗く比較的小規模な所だったが、品の数は相当なもので四方の壁に掛けてあるたくさんの時計には古いものや初めて見るような珍しい形をしたものまであり、この店の種類の豊富さを物語っていた。

「いらっしゃい」

汚らしい古ぼけたイスに座っていた店の主人と思われる頭の禿げ上がった男は低い声でそう言うと、すぐに読みかけの新聞に目を戻した。チャーリーは主人に軽く会釈をした後、いかにも高級そうな腕時計がズラリと並んでいる陳列ケースの脇をすり抜け、一番奥の目覚まし時計ばかりが置いてある一角へと足を進めた。彼は近くにあった時計に手を伸ばし、少し躊躇した。

とりあえず最後の抵抗だ。たとえ無駄な努力とわかっていてもやらないよりはマシなんだ。

今にもくじけてしまいそうな気持ちを励まし、これまでいろんな店で何回もしてきたように今度も一つずつ順番に台の上に置いてある目覚まし時計を鳴らしていった。

一つ目。だめだ。

二つ目。こんな音じゃ起きられないな。

三つ目。四つ目。五つ目。

店の主人がチラチラとこちらの方を見ていたが、そんなことも気にせず、地道に単純な作業を繰り返した。

そしてついに彼はその目覚まし時計を手に取った。

光沢のある黒一色に塗られたそのデジタル時計は少し古臭い流線型の形をしており、チャーリーはこの独特な丸みを帯びた形に奇妙な違和感を覚えた。デザイン的にはいまいちで普通ならまず売れな

いだらうというその時計は、なぜかチャーリーの心をひきつけた。外見はどうでもいい。興味があるのはこれで起きられるかどうかだけだ。チャーリーはその時計を手に取りアラーム時刻をセットし、元あった所に置くとそれはすぐに鳴り始めた。

「ヒビヒビヒビヒビヒビヒビヒビヒビヒビ…」

驚くべき音であった。たぶん他の誰かにはどうってことはない、さして大きい音でもないそのアラーム音はどういうわけかチャーリーにもものすごい衝撃を与えた。ずっと眠っていたのを突然起こされたかのように目の前にある景色がはつきりし、自分でも気づかぬうちに目覚まし時計の上部にあるスイッチを押し、音を止めていた。チャーリーは時計をしげしげと眺め、音に対する感想をまとめようとした。

まったくなんて音だ。いや、音自体は特に変わったところはないが、何かこう、胸にささるような、脳みそを直接ぶん殴られたような、とにかくすごいショックだった。

チャーリーは店の主人を見てニヤリとした。これに賭けるしかないか？賭けてみる価値はありそうだ。店の主人はチャーリーの視線に気づいたのか彼の方に目をやり、怪訝そうな顔をしながら、

「買うのかい？」

と言った。

「ええ。これは珍しいものなのでしょうね」

きつとそうに違いない。チャーリーは主人の方へと歩み寄りながら尋ねた。

「特に珍しくもない、普通の時計だよ。それほんとに買うの？」

普通の時計か。ならなぜ今まで見つからなかったのだろう。このデザインのせいで、あまり市場に出回らなかったのかもしれない。なんにせよ、これで起きられなければそれまでだ。後はどうにでもなれ。

チャーリーはお金を払い店を出た。やけくそ気味だがこの時計に対する期待はかなり大きかった。久々に味わう期待感で一時間は優

## 目覚まし時計

にかかる自宅までの道のりは決して遠くなかった。

家では何も考えないようにした。機械的に食事をし、風呂に入り、目覚まし時計をセットし、辞職願を書いた。

そして寝た。

翌朝、チャーリーはいつものあきらめ顔ではなかった。彼はまず窓の外の白々と明けてくる景色を見て驚き、昨日買った目覚まし時計を見てさらに驚いた。七時五分。

すばらしい一日の始まりだった。ゆっくりと朝食をとり、ゆっくりと身支度を整える。もういつものようにあわてて服を着替え、騒々しく部屋を出て行く必要もない。ゆっくりと新聞を読みながらソファでくつろぐ。自由な時間が無限に続くような気さえた。本当に久しぶりだ、朝を実感できたのは。

会社に到着。まだ誰もいない。少し起きるのが早すぎたようだ。がらんとしたオフィスは昼間の騒がしい労働の場所といった感じとはかけ離れた別世界のようだった。まさかここで小鳥のさえずりや風でざわめく木の葉の音を聞くとは思わなかったチャーリーは、とまどいとすがすがしい気持ち交互に入り乱れた変な気分になった。突如、ガチャンという音とともにオフィスのドアが開き、人が入ってきた。こんなにもドアの音がやかましいなんて。

「ほお」

入ってきたのは同僚のモーリスだった。

「まあ、たまにはね」

そう言いながらチャーリーは顔を少し上へ向け、すました顔をした。

「よつぽど昨日のチーフの小芝居が効いたみたいだな」

「いやまったく、彼はツボを心得ているよ。いかに効果的に人の心を揺さぶるかを知ってるね」

モーリスは笑いながら昨日まで遅刻魔だった男の横に座った。その顔は友人が会社をクビにならずにすんだことを喜んでいるのか満面の笑みだ。いや喜んでいるというよりは愉快そうだった。

「早くチーフの驚いた顔が見たい、そうだろ？」

「ああ。どんな馬鹿面をするか楽しみだ。おまえも期待してるだろ」  
モーリスは腕時計を見ながらニヤニヤしていたが、少しまじめな顔に戻ってこう言った。

「でも正直言つて本当に今回が最後の通告だと思ったよ。昨日言った言葉の真意のほどはわからんが、チーフはあれでもかなり悩んでたみたいだぜ」

「まあ奴とは入社以来ずっと仕事をしてきた仲だからな。ドリスを紹介してくれたのも奴だし。だからといって別段仲がいいわけじゃないんだが、つきあいが長いせいかな私をクビにはしにくいだろうな」  
「それに…実際のところどうなんだ？ 今日定時に出勤できたのは昨日の一件があったからって訳じゃないんだろ。その…本当に朝起きれるようになったのか？」

「ああ。もう大丈夫だ。おまえにはずいぶんと心配をかけてきたけど、私もやっと一人前になれたよ。本当に世話になった。お礼を言うよ」

モーリスは少し照れながらかぶりを振った。そして言いにくそうに再度同じ質問をした。

「その…本当に自分で朝起きれるようになったのか？」

「何を心配してるんだ？」

「ドリスか？ ドリスが戻ってきたのか？」

チャーリーは思わず吹き出した。

「たとえドリスが戻ってきたとしても家の中に入れるわけないじゃないか。知ってるだろ、私がドリスを憎んでいることを」

「しかし今まで起きられなかったものがなんで今頃になって…」

「目覚まし時計だよ。目覚まし時計を買い換えたんだ」

モーリスは何も言わなかった。会話のテンポが崩れ、妙な間ができた。

「おいおい信じてくれよ。本当に昨日、会社の帰り道にある時計屋で見つけたんだ。今度見せてやるよ」

そのとき、向かいのデスクの電話が鳴った。

「とにかくおめでとう。君はもう立派な社会人だ」

モーリスは電話の方へ歩きながらそう言った。チャーリーは笑って返事をした。

ぞろぞろと職場の仲間が出社するなか、彼はどきどきしながら自分のデスクに座り、緊張に身をこわばらせ、あれこれ思惑していた。もうすぐウィルズがやってくる。あのドアを開け私を見つけると

だらしなく口を開き、馬鹿みたいな顔をして私を見つめるだろう。あるいは驚きのあまり、ドアにへばりついたまま動かなくなるかもしれない。そして私はすかさずこう言うのだ。

「おはようございます。チーフ」

と。ウィルズはどう答えるだろう。

彼はどきどきしていた。これから起こる出来事に胸躍らせ、興奮していた。まるでパーティー会場へ向かうカップルのように。サーカスの公演時間を待つ子供のようにな。

彼はどきどきしていた。しかしその鼓動は少し早すぎた。

遅刻をしなくなつてからの数週間、チャリーは何もかもが順調でとても充実した日々を送っていた。ウィルズは気持ち悪いくらいに優しくなつたし、仕事もはかどり、会社に来るのが楽しくて仕方がなかった。そういつた訳で彼は毎日わき目もふらず、バリバリと働いた。真正面に座っているモーリスに、

「気分でも悪いのか？」

といきなり聞かれたときでもまるでおかまいなしという口調で、

「どうして？」

と聞き返し、すぐに机の上の伝票に目を戻したほどだった。どこも悪くないのにそんなことを聞かれたら誰だって変に思うだろう。しかし今のチャリーにはたいしたことではなかったのだ。

「いや、顔色が悪いんじゃないかと思つてな」

モーリスはデスクを仕切っているファイルの隙間から顔をのぞきこむようにしてそう言った。向かい側に座っている男は顔を上げることもなく、

「気のせいだろ」

と言い、仕事を続けた。気分が悪いはずじゃないか。悩みのない生活がどんなにすばらしいことか。ほら、大量にあるこの伝票ももうすぐ仕上がるぞ。

彼は心配してくれている同僚の言葉を気にも止めず、手早く仕上げたその伝票を上司に渡そうと席を立つて行ってしまった。

「ならいいんだが……」

モーリスは少し怪訝そうに首を傾げた。本当に気のせいかな？彼の顔はどう見ても真っ青だぞ。

その見解は正しかった。それはさっきの会話から五分と経たぬうちにウィルズがまったく同様の質問をチャリーにしたことで証明された。

「二日酔いか、チャールズ。顔が真っ青じゃないか」

やっとの思いで書き終えた伝票を受け取るうともせずウィルズは言った。チャリーは少しむっとし、とがめるような目つきで相手を見ながら、

「本当ですか」

と聞いた。

「ああ。具合が悪いんだつたら早退してもいいんだぞ」

ウィルズは心配そうにそう言った。

変だな。どこも悪くないのに。

さすがにチャリーも気にしない訳にはいなくなり、トイレに駆け込むと鏡で自分の顔を観察した。なるほど、確かに顔面蒼白だ。でもなんでだろう。風邪はひいてないし、昨日は酒を一滴も飲まなかった。気分が悪いだと？何言ってるんだ。今日なんか最高に調子いいぞ。そう思いながらも彼は心当たりを探していた。そしてただ一つ、気がかりなことを発見した。

朝だ。あの目覚まし時計で起きるようになって、どうも朝から動悸がするようになった。心臓に悪いのかな？ほら、今だってそうだ。胸がどきどきして時々苦しくなるほどだ。しかし、だからといって会社を休むほどひどくはないし、病気とは思えない。たぶん仕事の疲れが溜まってきたんだろう。最近はりきりすぎたからな。体調の悪い日だってあるさ。

その日を境にして、チャリーはこの症状を十分に自覚するようになった。実際、彼は体調のすぐれない日が続いた。どちらかというと精神的に不安定で、それが体に影響を及ぼしているようだった。しかし生活に支障をきたすほどではなかったのであまり気にせず、深く考えないようにした。にしても彼には体調が悪くなる原因がさっぱりわからなかった。

「チャールズ、あそこにある帳票書類を地下倉庫に持って行ってくれないか」

ウィルズはそう言うのと隅にあるコピー機の上を指差した。山積みされた帳票の量を見て彼の部下は露骨にいやな顔をした。仕方なしに、といった感じでわざとゆっくり椅子を後ろに引き、いざ立ち上がろうとすると真向かいに座っていたモーリスが、

「手伝ってやるう」

とだけ言っただけでコピー機の所まで行くと、おもむろに帳票を抱えてすたすたとオフィスを出て行ってしまった。チャーリーはしばしその光景をぽかんと見つめていたが、はっと我に返り、あわてて同僚の後を追った。

「どういう風の吹き回しだ？なんで急に私の手伝いなんかをするんだ」

「いやなに、ちょうど暇だったんだ」

さつきまで忙しく仕事をしてたじゃないか、とチャーリーは思った。やはり私の体を心配してくれているのだろうか。

二人は肩を並べて会社の廊下を歩いた。すれちがう人々は誰も彼もがせわしなく動き、チャーリーの目にはそんな忙しそうな彼らがうらやましく映った。最近自分の仕事が遅れ気味になり、周りの人に迷惑をかけていることを思い出し、情けなく思った。

「おまえ、本当に遅刻が治ったようだな」

モーリスは重そうに帳票を持ち直し、そっけなく言った。

「まあな」

遅刻しなくなっても仕事ができなけりやしょうがない。

「でも遅刻しない分、睡眠時間が短くなってるだろ。いつも顔色が悪いのは寝不足だからじゃないのか？」

モーリスがやけに真面目くさった口調で言ったので、チャーリー

は笑っていいものかどうか判断しかねた。

「残念ながらそれは違つよ。朝早く起きる分、夜も早く寝てるんだ」  
「なら最初からそうすりゃ良かったんだ。そしたら遅刻しないで済んだのに」

そんな簡単な問題じゃない、とチャーリーは言いかけた。しかしそんなことを言つて何になる。わかるはずないじゃないか、私がどれだけつらい思いをしたかを。モリスだって冗談半分に言っているのかもしれないし、苦しかった過去を思い出すのはよそうじゃないか。

「ほら貸せよ。これは私の仕事なんだから」

モリスから帳票をひつたくり、駆け足で階段を降りて行ったチャーリーは何かを振つ切つたようにいきいきとしていた。エレベーターの通じていない地下倉庫までの階段はかなり長かったが、彼にはちつとも苦にならなかつた。

私には妻もいないし子供もない。しかしこうして私の身を案じてくれる心優しい友人がいる。彼のためにも、もちろん私のためにもがんばるしかないんだ。

倉庫の前までたどり着くとチャーリーは帳票を片手で持ち、ノブに手をかけて倉庫の扉を開けた。そのとき、古めかしい少し錆の入つた鉄の扉はかすかにきしむ音を発した。

「キィ」

チャーリーの耳はその音を敏感に感知した。突如として頭の中は真っ白になり、瞬間記憶が途切れた。

「どうしたんだ？大丈夫か」

後ろからモリスの声が聞こえた。チャーリーは白目がちになるくらい大きな目で倉庫の扉を凝視していた。落とした帳票を拾おうともしない。

「おいチャーリー！」

「ああ大丈夫だ。何でもない」

のろのろと床に散らばつた帳票をかき集めながら必死になって落

ち着こうとしたが、手が震えて自制がきかない。今の音は目覚まし時計のアラーム音に似ていた。だからどうしたと言うのだ。何で私はこんなに動揺しているんだ。

容赦なく鼓動は早くなり、体はすくみ、脇から冷や汗が吹き出した。まるで得体の知れない大きな存在が押し寄せ、自分を圧迫するかのようだった。そのとき彼は何かに気づきかけた。しかしそれはすぐさま脳裏の奥底へと潜り込み、跡形もなく消え去った。いや、あるいは故意に押し止められたのかもしれない。無意識的な防衛本能によって。

彼はあやうく倒れそうになり、壁に手をかけた。体が重い。鈍器で殴られてもしたように頭がくらくらする。

「モーリス、ちょっとめまいがするんだ。悪いが帳票を片付けて倉庫に置いておいてくれないか」

チャーリーは蚊の鳴くような小さな声で言い残すと、ふらふらとした足取りでオフィスへと戻っていった。その日、彼は早退した。

家に帰ると即座にベッドに駆け寄り、目覚し時計の前に座った。なぜ私が音ごときにびくつかなければならないんだ？今日の彼は自問の連続である。

たかが目覚まし時計の音になんでこうも神経が過敏になるのだろう。よく考えてみれば、朝、この目覚まし時計の音で起きたところからすでに気分が悪い。とても驚かされたように心臓が強く打ち始めやがる。確かにこれくらい衝撃を受ける音でなければ起きることができない、ということにはわかる。そりゃ目も覚めるだろう。だからと言って動悸がするほど驚くこともなかるう。つまりはこの音の原因だということなのか。今日めまいがしたのも最近体調が悪いのもこの音のせいなのだ。私にとってとてつもなくいやな、強烈に不愉快な音なのだ。

しかしチャーリーは目覚まし時計を買い換える訳にはいかなかった。気分が悪くなるうが、めまいがしようが、クビになるよりはマシなのである。もう二度と遅刻をしたくなかったのだ。だが彼にとって目覚し時計の音はただ不愉快なだけだったのだろうか。彼は今日起こった出来事をそれ以上思い出そうとはしなかった。あのとき自分がどんな気持ちになったか考えようとしなかった。

不愉快な音。

彼はそう結論づけた。そして本質の部分を黙殺し、自分に嘘をつこうとしていた。

それからというもの、チャーリーはだんだんと音に対する感覚が鋭敏になっていった。日常生活におけるあらゆる音を意識し、何の音であるかを考えるようになった。ちよつとでも聞き慣れない音を耳にすると、たまらず調べに行くのであった。会社でも、音の出所を確認するために、たびたび顔を持ち上げる彼の姿が目立つように

なった。当然仕事は手につかず、仕事のペースは半減した。ウィルズはそんなチャリーを見てこう思うのだった。彼にはもともと社会的適応性がなかったのだ、と。規律を守るとか与えられた仕事をこなすとかの能力がかけているのだ。ウィルズだけでなく、同じオフィスにいた誰もが彼のオドオドした社会人らしからぬ姿に不信感を感じていた。長い耳をぴんと立て、エサを食べる口を動かしては止め動かしては止めて慎重に天敵の近づく音を聞き逃すまいとする臆病者の兔を連想させた。つい最近までの彼の自信に満ちあふれていた姿は影も形もなくなっていた。

自分はおかしくなり始めている。ふとそんな考えが頭をよぎる。まさか私は目覚まし時計の音が……。彼はその考えを首を振ることによって掻き消した。

チャーリーの朝の起き方はしだいに異様なものとなっていった。

まず目覚まし時計が鳴る。するとすかさずベッドから飛び起き（彼は本当に飛ぶのだ）アラームのスイッチを切ると、そこに手を置いたまま数分間立ちすくみ、息を切らし、困惑の表情で時計を見つめるのである。遅刻をしなくなってから二ヶ月が経ったその日もそんなドタバタした朝から始まった。

チャーリーは大きなため息をつくとベッドに腰掛け、両手で深々と頭を抱えた。

普通じゃないな。今の私は絶対に普通じゃない。

こめかみの血管が激しく脈打つのを指先で感じながら、ぼんやりとそんな考えを巡らせていた。まだ目覚まし時計の音が耳に残っている。その残響は強迫観念となって襲いかかり、平生をおびやかす存在となった。たまらず頭を持ち上げ、体に染み付いた悪夢を振り払うかのように体全体を揺さぶった。外は雨が降っている。ガラスにぶつかる雨音に神経を集中し心を静めた。キッチンへ行き、コップに水を汲み一気に飲み干した。いくらか冷静さを取り戻すことができ、安堵した彼はこれまでの過去の経緯を考えてみた。

目覚し時計を買い換えたこと、体調を崩したこと、朝の気分、アラーム音、ドアのきしむ音。あらゆることが一つの方向性を帯びていた。彼の意識はその考えに猛烈に反発し、受け入れようとしなかった。

目覚し時計の音が怖いだと？そんな馬鹿な！

喉の奥に苦いものを感じた。どうしようもなく気が滅入り、思わず悲嘆の声を漏らした。またもや不安が、今度は吐き気を伴ってこみ上げてきた。

私は病気か？本当に頭がおかしくなりかけているのか。一体いつから。遅刻をし始めた頃からか、それとも初めから私は…。

自分に嫌気が差してきたチャーリーは冷淡に鼻で笑い、そうすることによって自分を罵った。

たとえばムチで何回か叩かれた動物はムチのしなる音がしただけで痛みを思い出し、音に怯える。音が恐怖を誘うものを連想させるというのであれば、音が怖いというのもうなずける。しかし私の場合はそうではない。そのアラ・ム音には何のできごとでも連想させないからだ。音自体が怖いのか。まさか。音が怖い人間なんてこの世にいるものか。考えすぎだ。

彼はまったく普通の人間同様の拒否反応を表した。音が怖いという、ともすれば精神異常の兆候を示す事実に困惑し、ただやみくもにそこから逃れようとしていた。自分に対する目覚まし時計の音の影響を信じられなかった。信じたくなかった。とにかく自分はおかしくなっていない、そう思いたいだけだった。

すでにチャーリーは会社に行く気をなくしていた。風邪をひいて三十九度の熱を出したときでさえ会社を休まなかったチャーリーにとって、会社を休むという用件の電話をかけることは非常に勇気がいる作業だった。こんな気分のまま仕事をしたってはかどるはずがない。それよりも今日一日安静にして休養した方が明日からきちんと働けるというものだ。彼は勇気を振り絞って会社に電話をかけた。ウィルズとの会話はチャーリーがあっけなく思うほどすんなりと終わった。体を気遣う言葉が二、三述べられ、すぐに了承が得られた。安心したためか受話器を置くと即座に眠気が襲い、それに身を任せるべくベッドの上にひっくり返った。

正午を廻ってから自然と目が覚めたチャーリーは（どんなにすばらしい起き方だろう）体の回復を自覚したにもかかわらず、自堕落的にももう少し眠ってよかったと考えていた。しかしその考えは玄関のチャイムによってもろくも打ち砕かれ、名残惜しくもベッドの温もりから離れた。玄関を開けるとそこにはスーツ姿のモーリスが立っていた。

「ようチャーリー。具合はどうだ」

「今昼どきだぞ。会社はどうしたんだ？」

「客先から会社に戻る途中で寄ったんだ。本当は向こうで昼飯を食う予定だったけど、用事ができたとかなんとかごまかして抜け出してきた。あがつてもいいか」

チャーリーの返事を待たずにさっさと部屋にあがつていったモーリスは台所に行き、勝手にコーヒーを作り始めた。

「どうしたんだ今日は。遅刻しそうになったんで会社を休んだのか」  
台所の方からやけに陽気な声が出た。

「少し体の具合が悪かったんだ。でもだいぶ良くなってきた」

「そうか。病院には行ったのか？」

モーリスはコーヒーをリビングに持って行き、深々とソファアームに腰を下ろした。

「いや行ってない。それほどひどくはなかったし、まあ簡単に言えば寝てただけだったんだ」

モーリスは安心したようにうなずくと、病人のために昼食を作り台所へと歩いて行った。

それから一時間ほどとりとめのない雑談をかわし、楽しいときを過ごした。しかしチャーリーはどことなく元気がない様子で時々顔つきが真剣になり、何かを考えているようだった。

「やっぱり具合が悪そうだな。これから病院に行くか？なんなら付

き添ってやってもいいぞ」

モーリスは彼の心情を察したようにさりげなく聞いた。

「いやそうじゃないんだ」

チャーリーはそう答えると、隣のベッドルームにある目覚まし時計をぼんやりと見つめた。

「ベッドがどうかしたのか」

チャーリーはさらに険しい表情になった。口が優柔不断に開いたり閉じたりし、次の言葉が出るまでにかなりの時間がかかった。

「あそこにある目覚まし時計のおかげで遅刻しないようになったんだ」

「ほお、えらく根性の入った目覚ましだな。何しろ遅刻魔チャーリーを起こすくらいだもんな」

モーリスはつとめて明るい口調でそう言った。友人を元気づけるためだ。しかし当の友人の表情は険しいままだった。

「もしかして私はあの目覚ましの音が怖いのかもかもしれない」

よどみなく続いていた会話はその告白によって突然中断され、二人の間に沈黙が舞い降りた。モーリスの顔からは笑みが消え、そのままチャーリーの視線を追った。

「あの目覚ましの？」

「ああ」

「音が？」

「……」

「怖いのか」

「わからない。ただ、私の神経に障ることは間違いない」

モーリスはベッドルームに顔を向けたまますくと立ち上がり、歩き出した。そしてベッドに近づくと、時計を手に取り丁寧に観察した。

「そんなにすごい音なのか」

「いや、音自体は普通なんだと思う」

しばらく躊躇していた言葉がモーリスの口から発せられた。



モーリスは彼の反応をどう受け取っていいかわからなかった。二人の男は身じろぎもせず、目覚し時計の鳴り響く中をじっとしていた。と、突然チャーリーは瀕死の動物のようなものすごい形相でベツドルームへと近づいて行き、凄まじい勢いで目覚まし時計のスイッチを止めた。そしてそこでうずくまり、押し殺された小さな悲鳴を上げた。モーリスは恐る恐る彼の方へと手を伸ばしたが、小刻みに震えているその背中が触るとそれが引き金となって感情が爆発してしまいそうに触ることができなかった。今にもその辺にあるものを手当たりしだいに叩き壊していきそうな雰囲気だった。徐々に震えが止まり、チャーリーはあつげにとられたモーリスの顔を見ると、逃げるかのようにリビングに舞い戻り、また静かにソファアの上で硬直した。

それから長い時間、二人は一言もしゃべらずリビングでじっとしていた。モーリスは神経質そうに煙草に火をつけ、真正面に座っている男を横目でちらっと見た。気味が悪いほど静かだ。本当に目覚しの音が怖いのか。はたして音があそこまで人間に恐怖を感じさせるものなのだろうか。チャーリーは一見すると落ち着きを取り戻しているかのように見えた。しかし頭の中で激しい葛藤と戦っているようにも見えた。

「あの目覚しの音だが、  
とモーリスは切り出した。」

「はつきり言っただけには何も感じなかった」

チャーリーはキツと相手の顔を睨んだ。なぜだかわからない。加速度的に鼓動は早くなり、平常心が保てなくなっていた。モーリスは続けてこう言った。

「私にはどうってことない音だったよ」

チャーリーの顔がゆがみ始めた。その表情には人格が失われ、破壊されていく様子がありありと浮かんでいた。

「どうってことないだろ？」

ちよっと間をおいてチャーリーは言った。顔はさらにゆがんでい

く。

「まさか…、とてつもなく異様な音じゃないか」

裏返った声。狂ったようなしぐさ。視点は宙をさまよい、目には涙が浮かんでいる。もはやモーリスには彼を理解することができなかった。

「落ち着けよ、チャーリー。さつきとまるで反対のことを言ってるぞ」

「本当に恐ろしい音だ。そうだろ？あの音は普通じゃない」

おまえの顔こそ尋常じゃないぞ。モーリスはそう思った。目の前にいる男は明らかに取り乱し錯乱していた。

それから数分後、どうにか彼をベッドに寝かせ、安静にさせることに成功した。ベッドに横たわっている友人の顔を見ながら、先ほどの異常ぶりを思い出し、なんとか彼を救わなくては、とモーリスは思っていた。彼を起こさぬよう一人静かに部屋を片付け、玄関に向かった。

モーリスは会社に着くなり、事の一分始終をウィルズに伝えた。かなりシヨッキングな話だったようで、ウィルズは部下の前ではめったに見せないうるたえた表情をしていた。チャーリーの奇行よりもむしろ、遅刻魔チャーリーが単なる自堕落なサボリ癖の持ち主などではなく、もともと現在ののような勤勉で優秀な社員だったということが彼の心臓をちくちくと痛めているようだった。

「珍しい病気にかかっているんだと思うんです」

モーリスは真面目くさった口調でそう言った。

「珍しい病気とは？奴は病気なのか？」

ウィルズはたいそう驚いている様子であった。

「ええ、たぶん。精神的な何か、ストレスや過労などによって体のバイオリズムが崩れてしまったとか、そういった類いの心の病いにかかっているんだと思います。たとえば登校拒否症の生徒の中には学校に行かなければならないというプレッシャーから、朝突然下痢を起こしたり、頭痛がしたりする者がいるそうです。もともと生真面目な性格のチャーリーは、遅刻をしてはならないというプレッシャーから精神的に参ってしまい、体に異常をきたしたのではないでしょうか」

「しかしドリスのいたところは遅刻などしたことなかったじゃないか」「それが原因ですよ、チーフ。ドリスと別れたことがそもそも原因なのではないかと。あのときの彼の心痛は傍目から見ても痛いほどよくわかりました。酒の量も増えて、あまりちゃんとした食事もとってないようだったし。そうした不規則な生活と精神的ストレスからこのような状況になってしまったのでしょう」

ウィルズは落ち込んでいた。肉付きの良い大きな手のひらで何度も何度も顔をなで、そのまま顔を伏せてしまっていた。そこから細く小さい声が漏れる。

「仕事以外はだらしない奴だった。たぶん両親の血を継いでいるんだろう。子供の頃からあいつの身の回りの世話は全部家政婦がやり、親は何もしなかったそう。育児も家事も家のことすべて家政婦まかせで。就職して一人暮らしをするために今のアパートに引越すまでは、つきつきりで世話をしていたらしい。そのせいか一人暮らしの生活はひどい有様だった。一度、彼の部屋を訪ねたことがあるんだが、あまりの部屋の汚さに驚いたよ。正直、奴が社会人として人並みにやっていけるのかどうか不安になったもんだ。ただ仕事の面だけを見ると真面目でよく働く好青年だったので、なんとかしてやりたいと思つてドリスを紹介したんだが、まさかこんなことになるとは……」

ウィルズは自責の念にかられていた。自分の部下をこんな目に遭わせたのはすべて私のせいだ、と。せめて彼の異常にもつと早く気づいてやれさえすれば。遅刻をし始めた時点で病気のことを理解してやれさえすれば。クビにするなどと追いつめたりしなければチャールズがこんなにおかしくならず済んだのに。音が怖い……か。彼は本当に壊れてしまったのだろうか。

「チーフ、もし私があなたの立場であつても、あなたと同じようにチャーリーを叱咤したことでしょう。病気だろうがなんだろうが、彼が遅刻常習犯であることには変わりはない。あなたは忙しい人で、部下の病気、とりわけ今回のような特殊なケースだと気づくのに時間がかかるのも無理はないと思います。ただチャーリーを少しでも哀れむ気持ちがあるのなら、彼に寛大な対処をお願いしたいです」

「もちろんだとも」

ウィルズはしばらくの間、チャーリーの出勤時間について本人にあれこれ言つのはよそうと心に誓つた。

チャーリーが会社に出勤してこなくなっただけから一週間が経過しようとしていた。結局ウィルズは仕事が忙しかったせいもあり、見舞いに行つてやる事ができなかった。もう会社をやめてしまったのだろうか。電話をしても出ないところを見ると、田舎に引つ込んでしまったのだろうか。ウィルズは心配する一方で、実はその方が彼のためにも良かったのでは、と思うのだった。

「もう一週間が経ちますね」

モーリスはできたての書類をウィルズに手渡しながらそう言った。「そうだな。そろそろ出勤してきてもいいと思うのだが」

「彼の仕事はみんなで分担して処理しています、さすがにしんどくなくてきましたね。彼でないとわからない部分もありますしね」

ウィルズは少し間を置き、ためらいながらこう言った。

「モーリス、もし今日暇があるなら会社が終わった後にも様子を見に行つてくれないかな」

彼の顔は少し恥ずかしそうであり、またさみしそうだった。チャーリーはとつくの昔に私のことを嫌いになつてきているだろう。いつからだろう、彼との間柄が上司と部下以外の何ものでもなくなつてしまったのは。入社当時は一緒に釣りに行つたり、キャンプに行つたりしたものだ。

「私が行つてもいいのだが、そのう…、少し行き辛いんでね」

「そのつもりでした。実は昨日、ドリスから電話がかかってきたんです」

「ドリス？本当か？」

ウィルズの顔がぱつと明るくなった。

「ええ。チャーリーとよりを戻したいらしいのですが、チャーリーが一向にとりあつてくれないと相談を持ち掛けられました」

「そりゃ良い話だ。ドリスが戻つてくれば遅刻をすることもなくな

るし、目覚まし時計からも逃げられる。万事解決じゃないか」

「そうなんです、なにぶんチャーリー自身が嫌がってるんで少し難しいことになりそうなんです。かなりプライドが傷つけられたみたいで、今だに顔も見たくないと言ってます」

「しかしチャーリーにとってはまたとないチャンスだぞ。ドリスと復縁することが最良の解決策だと思わんかね」

「ええ。とにかく今日ドリスの話も含めて見舞いに行ってみます」

「ぜひそうしてくれ」

ウィルズは初めて部下に握手を求めた。モーリスは彼の差し出された手を見て一瞬驚いた。その手にはよろしく頼む、という心からの切なる願いが込められていた。

「まかせてください」

モーリスはそう言い、固く握手をすると自分の席へと戻って行った。

モーリスがチャーリーの家を訪れたのは夕方の七時頃であった。そのときチャーリーは目が覚めていた。たまたま、といって良いだろう。モーリスは例によつて勝手に部屋へと入り、台所でコーヒールを作り始めた。

「どうだ、調子の方は」

両手に持ったカップの片方をチャーリーに差し出しながら、モーリスは言った。

「ああ、まずまずだ」

そう言いながらカップを受け取ると、そのまま口に持っていった。「あれからあの目覚まし時計は全然使っていないんだ。おかげで朝はまるつきり起きられなくなったよ」

「まあしょうがないさ。でもそろそろ会社に出勤してこないとクビにされてもさすがに文句は言えないぜ」

「わかつてる。わかつてるんだが、どうもね……」

モーリスはベッドの方を見た。そこには目覚し時計の姿はなかった。

「ウィルズはなんて言ってる？もう愛想つかされたかな」

「いや彼なりに理解しようとしているよ。むしろ君に謝りたいと思つてるんじゃないかな」

「ウィルズが？」

「ああ。今回の一件について、彼は少なからず自分にも責任があると思つているみたいだ。おまえを精神的に追いこみ、病気にさせてしまった、とね」

そこまで言うと、モーリスははっと口をつぐんだ。『病氣』という言葉にチャーリーが変な反応をしなければいいのだが。彼はあわてて言葉を付け加えた。

「おかげでおまえの遅刻はしばらくの間、記録に取らないそうだ。」

さあこれで堂々と遅刻ができるぞ。どうだ、会社に来る気になったか？」

チャーリーは自分を情けなく思った。今までの自分は、ただ単にウィルズに甘えていただけではないのか。普通の会社ならとっくの昔にクビになっていてもおかしくないような自分に、ここまで根気強く付き合ってくれる上司になんて他にいるだろうか。なんと少しでも恩返ししたい。

「明日から会社に行けば、ウィルズはいつものように接してくれるだろうか。みんなは私を歓迎してくれるだろうか」

「もちろん俺を含めたみんなで歓迎するよ」

モーリスは溢れんばかりの笑顔でそう答えた。その笑顔はチャーリーを勇気付けるのに充分だった。

「わかった。じゃあ明日からちゃんと会社に行くよ。ただ、最近反動のせいか一日中寝っぱなしのことが多いんだ。起きてみると外が真っ暗で会社にも行けない。朝まで起きていようと思うんだけど出勤時刻になるとウトウトし始めてつい眠ってしまう。こんな状態がずっと続いているんだ」

「そろそろ生活を正常に戻したほうがいいぞ、チャーリー。目覚ましの呪縛から逃れて安心感もあるから気が緩むのもわかるが」

「わかってる。でもまだ呪縛から逃れられた訳じゃないぜ」  
「なんで？」

「ウィルズが自由出勤を認めているのは数日間だけだ。その後、規則正しく出勤するためにはまたあの目覚ましを使わざるを得ないじゃないか」

「あの目覚ましはもうやめとけよ。それよりいい方法があるんだ。ためしてみないか」

「どんな？」

「ドリスだよ。ドリスが戻ってくれば…」

「やめてくれ。彼女の顔は見たくもないんだ。それくらいなら遅刻したほうがましだ」

「おまえの気持ちもわかるがドリスは真剣だぜ。一時の気の迷いだ  
と本人も反省しているし、昨日は電話で…」

「すまんが、もう眠い。明日は必ず出勤するから今日は帰ってくれ。  
今のうちに寝ておかないと翌日起きられないからな」

「しかしドリスは…」

「ほんとに明日は出勤するって。遅刻はするかもしれないけど」

チャーリーは無理やり話を切り上げ、モーリスを帰らせた。確かにこのときのチャーリーはひどい眠気に襲われていた。その日のチャーリーが深い眠りにつくまでに、それから五分とかからなかった。

目が覚めるとチャーリーの視界に真つ先に飛び込んだのはドリスの泣き顔だった。最悪だこの女。家に勝手に入ってきやがって。チャーリーは大声で文句を言っただけでやろうと体を起こしたが、彼女の後ろに立っているモーリスの姿を視界にとらえ、びっくりして言葉を失ってしまった。ドリスはともかくモーリスはうちの合鍵を持っていないはずだ。まさか付き添ってきたのか？そこまで考えてチャーリーは何か違和感を感じ、辺りを見回してみると、二人以外の見知らぬ人達とその後ろに自分の家ではない殺風景な部屋の景色が目に見え、飛び込んできた。

「ここは一体……」

「病院だよ、チャーリー」

モーリスは心配そうな顔をしてそう言った。ドリスはベッドに座っているチャーリーのひざの上に泣き崩れた。まったく状況が飲み込めない。訳も分からず、ただただ混乱するばかり。

「三日間眠りっぱなしだったんだよ。おまえと別れた翌日、朝ドリスを部屋に行かせたんだ。おまえを起こしてもらったためにね」

ドリスは泣きながらもモーリスに続いてしゃべり始めた。

「あなたの部屋に行ったのはいいけど、何度起こしても起きないの。死んだんじゃないかと思って心配したのよ」

「そう、そして彼女から会社と連絡が入って、私が救急車を呼んだ。それが三日前のことだ」

信じられない話だ。三日間も眠りっぱなしなんて……。

「本当なのか？」

「もちろん本当さ。現におまえはこうして病院にいる。ほら、ここに医者だっているぞ」

モーリスは横に立っている白衣を着た見知らぬ男の方を見て、そう言った。

「眠り病だとよ」

眠り病？そんな病気があるのか？

「眠り病というのは冗談ですよ、チャールズさん。あなたは三日間、一種の植物状態に陥っていました。このまま眠り続ければ危険な状態になっていたかもしれない。あまり例のない症状なのでまだなんとも言えませんが、恐らく心因性のストレスからくるものだと思います」

白衣の男は真剣な顔でそう言うと、チャーリーの腕をとり、脈を計り始めた。

「とりあえず検査をしますのので後で診察室の方へ来てください」

三日前……。あの日モーリスを帰した後、とてつもない眠気に襲われてすぐにベッドに向かった。それは覚えている。でもそこからの記憶がまったくくない。眠っていたと言われればそれを信じるしかないが、あれから三日も経過しているなんて。

「まあしばらくは安静にしておくことだな。変な病気だと困るしこの際ちゃんと診てもらった方がいい」

「ああ、そうだな」

確かにモーリスの言う通り、ちゃんと診てもらった方がいい。三日間も眠り続けるなんて正常な人間ならありえないことだろう。いやそれだけじゃない。ここ最近の自分はおかしなことだらけだったじゃないか。音が怖いなんていう病気があるんなら、ここできちんと診てもらって完治するんだ。

しばらくしてモーリスとドリスの二人は家に帰った。ドリスは今日一日だけでも病院に残って付き添いたいと懇願していたが、チャーリーの頑ななまでの拒否の姿勢に根負けし、その日は退散せざるをえなかった。その後診察が行われたが、血液採取などの簡単なものばかりであった。ただ来週辺りでもっと大掛かりな検査をするらしく、MRIを含む色々な検査の日取りを決めさせられた。少々おげさな気もしたが、これでここ最近のおかしな症状がすべて治るのであればそれにこしたことはない。ついでに遅刻癖も治すことが

できれば…、という期待もあった。もしここを退院できたら今度こそウィルズや周りの人に迷惑をかけないような人間になろうと心に誓った。

夜、消灯時間が近づくにつれ、眠ることに不安を感じた。部屋の電気が消されてもチャーリーはしばらく眠れなかったが、固い決意と希望を胸に抱き、静かに目を閉じた。

その後、チャーリーは意識のない状態に陥った。

その日はモーリス、ドリス、ウィルズの三人が病院へ見舞いに来ていた。チャーリーが病院に運ばれてから早くも一ヶ月が経とうとしていたにもかかわらず、いまだに意識は回復しないままだった。

チャーリーのベッドはすでに個室から一般病棟の六人部屋に移されていた。検査の結果には特に異常はなく、意識が戻らない原因がまるでわからない、と言うのが病院側からの言い分だった。担当医は『恐らく』と前置きをした上で、

「あらゆるストレスが蓄積した結果、彼の深層心理が実社会へ戻ることを拒んでいるのではないか」

との見解を示した。次の週には精神科へ移されるだろう、と見舞いに来ていた三人に告げられた。その言葉で彼らにはだいたいのが予測できた。精神科というのは多分臨床心理科であること、つまりチャーリーは末期患者の扱いなのだ。この病院は彼を見放してしまったのだと。

まさかこんなことになるとは。三人は途方に暮れていた。そして三人とも、彼がこんなことになってしまった原因が自分にあるのでは、と自責の念にかられていた。

夫を裏切るようなことをしなければ。

友人の異変にもっと早く気づいていれば。

部下を追いつめすぎてしまったのではないか。

ドリスが泣き崩れるのを見て、担当医は静かに三人の元を離れた。ウィルズは彼女の肩に手をかけ、ベッドの脇にあった椅子に彼女を座らせた。ドリスの気持ちは良くわかる。もしチャールズがこのまま 考えたくもないが 死ぬようなことになれば、自分のせいで夫とわだかまりを残したまま死別することになってしまう。そして一生罪を償うことができないのだ。自分を責める気持ちもわかる。でもそれは私も同じことだ。

「ドリス、君のせいじゃない。結局私はチャールズに精神的な負担ばかりをかけてしまった。すべての原因は私にある」

ウィルズはそう言うのと彼女の手を強く握り締めた。ドリスは何も言わず、ただただ涙を流すだけだった。それぞれが悲しい気持ちに打ちひしがれながらも、面会時間ギリギリまでチャールリーを見舞った後、三人は帰宅した。

翌日、チャールリーの両親が病状の詳しい説明を伺いに病院を訪れた。とはいえ担当医から聞かされた話は、今のところ原因がわからず処置のほどこししようがない、というなんとも頼りない内容であった。点滴等で生命を維持してはいるが、このまま昏睡状態が続けば体が衰弱し、生命の危機にも及ぶと伝えられた。これほどまでに病状が悪化しているとは思っても見なかった両親は、医者その言葉に驚きを隠せなかった。

病室へ行くとチャールリーのベッドの傍らにドリスが座っているのが見えた。彼女と両親はいままでほとんど会話をしたことがなかったが、ここ最近は病室で会うことも多くなり、自然と色々な話をするようになった。一時的にもチャールリーを見捨てたドリスに対してははじめこそ頑なな態度を示していた両親であったが、入院して以来ずっと付き添っている彼女の様子を見て、本当にチャールリーのことを想ってくれていることを察し、だんだんと態度を軟化させていった。

「こここのところ毎日ここへ来ているんじゃないの？」

「ええ」

母親の問いかけにドリスはそう答えると、チャールリーの手を握り締めた。

「あなたにもあなたの生活があるんだから、あまり無理をしちゃダメよ」

「わかっているわ。でもこの人が目を覚ましてくれないと私は困るんです。昔のような夫婦生活に戻れなくてもいいの。少なくともチャ

リーに私のしたことを許してもらえらるまでは私の好きにさせてください。そうしないと一生後悔することになるから」

そう言ったドリスの目には涙が浮かんでいた。

夕方になってモーリスが見舞いに来た。思ったより病状がひどいことを両親から聞いたモーリスは、哀れな友人の運命を呪った。その後は互いに交わす言葉もなく、その場にいた四人はベッドに横たわったチャーリーを無言で見つめ続けるしかなかった。重苦しい雰囲気病室内に漂っていた。

長い時間が過ぎ、もうそろそろ帰ろうかという雰囲気の流れ始めた頃、突如として隣りで寝ている患者の物と思われる目覚まし時計がけたたましく鳴り始めた。その瞬間チャーリーはがばつとベッドから飛び起き、ものすごい早さで隣りのベッドの脇にある目覚まし時計のアラームを止め、息を切らしながらその場に立ち尽くした。その光景を見た四人は突然のことに啞然としていたが、モーリスははっと何かに気づいてチャーリーの手の下にあるその目覚まし時計を確認した。それはチャーリーの部屋で見た目覚まし時計と同じものであった。

完

# 広告募集中

小説関連広告に最適です。  
出版社や印刷会社はもちろん、  
個人の広告でもOK

縦：140mm 横：110mm

詳しくはPDF小説ネット広告募集をご覧ください。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネットは2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3054d/>

---

目覚まし時計

2008年8月29日17時55分発行